



出雲市トキ放鳥決定記念

飯塚市長×村上康成さん特別対談 「いのちトキめく生きものたちの出雲」

令和9年初夏に出雲市でトキの放鳥を実施することが決定したことを記念し、人気絵本作家である村上康成さんをお招きし、8月9日に「いのちトキめく生きものたちの出雲」と題し、ワークショップを開催しました。(ワークショップの様子は表紙に掲載)

翌日には、ワークショップで子どもたちが作った作品の前で、村上さんと飯塚市長による対談を行いました。

島根・出雲の自然とトキの放鳥

島根・出雲の魅力

(飯塚市長)

村上さんは、渓流釣りがお好きで、プライベートでもよく島根県に来られているそうですね。日本全国、世界各地でも活躍されるなかで、島根・出雲に何度も来られているのは、何か特別な魅力があるのでしょうか。

(村上さん)

最初は、このあたりにしかない珍しいイワナに魅力を感じて来たんですけど、それを真剣に愛する人たちがいて、その人たちの心意気や優しさみたいなものを感じ、とても心地よい時間を過ごせる場所となりました。

また、海と山はもちろん、宍道湖があって、大きな川もある。生きものを育む環境としては、出雲ならではの魅力があると思います。

トキを当たり前の存在に

(飯塚市長)

出雲市は、令和9年初夏に、一度絶滅したトキを放鳥します。なぜ出雲市でトキに取り組むのかとよく聞かれますが、トキの放鳥は、単一の種を守るという取組ではありません。トキを通じて、市民の環境保全に対する意識を高め、生物多様性の維持、里地里山の保全につなげ、そして、私たち人間にとっても暮らしやすいまちをつくることを目的としています。

(村上さん)

トキだからって、特別扱いするのではなく、10年後、20年後にトキも出雲の自然の中に溶け込んでいる環境が理想ですね。トキという一つの種が転校生として現れて、みんなと仲良く暮らしていくみたいな。

(飯塚市長)

放鳥は大きな節目ですけど、めざすのはその先にある定着です。村上さんがおっしゃるように10年先、トキは特別な存在ではなく、出雲で当たり前暮らし生きものの一つになっている環境をめざしています。

(村上さん)

この前、北海道に行ったんですけど、目の前に大きい鳥がいて、なにかと思ったらタンチョウだったんですよ。トキもそんな感じで、当たり前にいる存在になってほしいですね。

さりげなくも美しい色をしたトキを日常的に目にして、「トキさん、おはよう」みたいな。そんな風景いいですよ。



ワークショップに込めた思い

絵が持つ力

(飯塚市長)

子どもたちにどんなことを伝えたいと思ってワークショップに取り組んでいらっしゃるのですか。

(村上さん)

私のワークショップは、理科でも絵の授業でもありません。今回は、トキが食べるエサとなる生きものを描くことがテーマでしたけど、絵というものを手段として、子どもたちの感性や創造性などをどう引き出すかを大切にしています。

絵を描くなかで、「わー！きれい」とか「カッコいい」とか、自分の中で沸き立つもの、それこそが絵の持つ力だと思います。

以前は、子どもたちに自分が描きたいものの下絵を描いてもらってたんですよ。そうすると、上手な絵ができてあがるんですけど、どこかつまらない。慎重がゆえに勢いが無いというか。決断する勇気や表現する情熱みたいなものが生まれてほしいなと思って、下絵なしで、まずハサミで生きものの形に切ってもらう方法に変えました。

出雲は皮膚感覚と心の両方を育める場所

(村上さん)

最近、便利なものに頼りすぎてしまっている気がします。学習能力はすごいと思うけど、クリエイティブな感覚は果たして養えているんだろうかって思います。いろんな情報が押し寄せてくるなか、見て覚えることが全てではなく、自分がどう考え、感じるか。オンリーワンの「自分の思い」を大切にしてほしいですね。

子どもたちには、生態系が云々とかいう理屈的なものじゃなく、身体が喜ぶ環境と時間を大切にしてほしいですね。そのためにも、たくさん外に遊びに出かけてほしいと思います。

外の気温や光、風や匂い、頭からつま先までまわりつくものを感じて、五感を養ってほしいと思います。

(飯塚市長)

出雲は、五感を育てるには非常にいい環境だと思います。ちょっと踏み出せば、いろいろなフィールドが広がっていますからね。

(村上さん)

しかも神様がたくさん集まる場所ですよ。それは心の部分かもしれないですけど、皮膚感覚と心、両方が育める貴重な場所だと思います。

(飯塚市長)

心の部分の話になりますが、出雲では神話の時代から話し合いで物事を解決し、相手を認め、みんなで共存共栄を図ることが大切にされてきました。これは世界に誇るべき文化だと思っています。

(村上さん)

世界の指導者と言われる人は、ぜひ出雲に来て学んでほしいですね。そうすれば、戦争もなくなると思います。

私は自然の中で育ったので、いわばアニミズムのような、葉っぱ一枚一枚にも神様が宿っているという感覚なんですけど、その感覚が神話として根付いていて、そこに自然の生の部分も織り込まれている。やはり出雲は貴重な場所だと思います。そんな場所にトキが羽ばたくんですから、こんなに素晴らしいことはありませんね。



絵本を通じて伝えたいこと

「分身」のような絵本

(飯塚市長)

出雲市では、子どもの頃からトキや自然環境に親しんでほしいと思い、令和6年度にオリジナル絵本『いずものトキ くるりのぼうけん』を作成し、3歳児健診で来られたお子さん全員にプレゼントしています。

村上さんは、絵本の中で、生きものの視点から「人の暮らしと一緒に営まれる自然の命」について描かれています。絵本を通じて伝えたいことは何ですか。また、絵本を作るうえで、大切にしておられることはどのようなことでしょうか。

(村上さん)

絵本の中に主人公がいますが、絵本を開く読者も主人公です。その関係性は人それぞれだから、同じ絵本だけど見る人によって受け止め方は全然ちがう。そこに正解はありません。

百花繚乱でサービス精神旺盛な絵本は、一度読むとお腹一杯になってしまうと思うんです。だから、あえて腹八分目くらいにして、残りの部分を読者一人ひとりに膨らませてもらうイメージで作っています。絵本は物事を知るためのものではなく、絵本を通して、子どもたちの気持ちを湧き立たせるためのものだと思います。読者にとって、一生の友達っていうか、自分の分身のような絵本だと言ってもらえると嬉しいです。

(飯塚市長)

たしかに、子どもの頃に読んだ絵本、親として子どもへの読み聞かせで読んだ絵本、同じ絵本でも、その時その時で自分にとっての存在は違いますよね。

(村上さん)

一つの種を絵本の中に忍ばしておくイメージです。その種を読者が飲み込んで、すぐには芽生えないかもしれないけど、いつかニュッと芽が出て育ったらいいと思います。



人間は地球そのもの

(村上さん)

僕の場合は、自分が現場で体感し、皮膚感覚で知っている自然を描くことが多いです。

(飯塚市長)

絵本『石のきもち』を読ませてもらいました。主人公が石なんですけど、石や大地はずっとそこにいて、いろんなものを見てきたんだってことや、石からすると我々人間は一瞬でしかないことにあらためて気づきました。

(村上さん)

もしかしたら来年トキを放鳥する場所だって、そこにいる石は「トキさんひさしぶり」って言うかもしれませんね。

(飯塚市長)

たしかに、私たち人間は「トキを放鳥するぞ」と、新しいことのように言っているけど、地球の長い歴史から見れば「帰ってきたね」とか「おかえりなさい」って感じなんですよ。

(村上さん)

地球が誕生して46億年くらいですけど、人類が出てきたのが数百万年前。人間らしくなったのなんて、ほんの30万年前です。地球から見れば人間って新参者なんですよ。その割には大きな顔をしていますよね。

ワークショップでもお話ししましたが、人間が食べているものは全部自然のものです。スマホを食べられるわけじゃない。人間は、あたかも生物界を支配しているかのようですが、実は生物界でしか生きていけないんです。絵本『石のきもち』で伝えたいのは、僕たち人間は、「地球人」じゃなくて「地球そのもの」なんだってことです。



人と自然の共生

環境問題は地面に寝転んで考える

(村上さん)

「自然との共生」っていう言葉は、理解はできるんですけど、「人間の考えで地球を良くしよう」というのが傲慢で偉そうに感じてしまうんですね。

(飯塚市長)

たしかに、自然との共生って人間が言っていることですもんね。文明や経済を発展させるために自然を犠牲にしている一方で「共生しましょう」って言うのも矛盾を抱えている気がします。

(村上さん)

ただ、行政として環境問題に対していろんなことを仕掛けていくのは、現実的に必要なことです。いったん地面に寝転んで五感で感じてみてはどうでしょうか。ふかふかのベッドで環境問題を考えたところで、何も浮かんでこないと思うので。



トキは環境のバロメーター

(飯塚市長)

トキは一度絶滅した鳥だからこそ、定着してくれることで、今の自然環境の可視化につながります。ある意味、私たちが暮らすまちの環境を測ってくれるバロメーターのような存在になると思っています。

(村上さん)

期待していますよ。僕がかれこれ四半世紀通っている出雲で、トキが普通にのこのこ歩いてたり、飛んでたりする風景が見られたら、こんなにいいことないなって思います。

(飯塚市長)

いつか村上さんの作品に出雲のトキが登場するのを楽しみにしています。

村上康成(むらかみやすなり)

1955 年、岐阜県生まれ。創作絵本をはじめ、ワイルドライフ・アート、オリジナルグッズなどで独自の世界を展開している自然派アーティスト。

『ピンクとスノーじいさん』、『ようこそ森へ』(徳間書店)、『プレゼント』(B1出版)でボローニャ国際児童図書展グラフィック賞、『ピンク! パール!』(徳間書店)でブラチスラバ世界絵本原画展金牌、『なつのいけ』(ひかりのくに)で日本絵本賞大賞を受賞。

主な作品に、『ピンク、ぺっこん』(徳間書店)などのヤマメのピンクシリーズ、『石のきもち』『くまくんです。』(ひさかたチャイルド)、『まっている。』『おおきくなったらきみはなんになる?』(講談社)、エッセイに『水ぎわの珍プレー』(講談社)、『さつまのおいも』(童心社)などのピーマン村シリーズや、児童文学に『黄色い亀』(徳間書店)など多数ある。

石垣島に、村上康成絵本ギャラリーがある。

<https://ymshopmint.cart.fc2.com/userpage?id=92594>



村上康成原画展

絵本で感じる、もりと、
かぜと、わたし



開催日 10月24日～12月6日

会場 島根県立三瓶自然館サヒメル

料金 入館料(大人500円、小中高生250円)